

薬用植物園-その機能と役割 (園長 小林 義典)

薬学における薬用植物園の役割は、大きく三つあります。一つは薬学教育への寄与、残り二つは研究への寄与と地域貢献です。薬学教育への寄与は、薬学の歴史の原点としての薬用植物、生薬の基原植物、さらには現代における重要医薬品の原料としての薬用植物を生きた教育材料として提供することです。本学では一年生が学部と離れた相模原での生活の中で、ややもすると薬学生としての意識が希薄になる時期、少しでも薬学生であることを自覚させ、目的意識を持たせる上での役割が大きいと考えています。

研究への寄与では、良質な生薬を生産・供給するための基原植物の生息域外保全や栽培法の検討、および品質の向上に関する研究を推進しています。さらに本学薬学部生薬学教室や東洋医学総合研究所とともに、従来の植物形態学的あるいは化学的な方法から、薬理学的な評価、さらに最新の遺伝子型解析法、NMR メタボローム解析法などを導入する努力が実を結びつつあります。

地域貢献の一環としては、2006年からは相模原市との協定に基づき、相模原市民向けに「薬用植物栽培・加工体験講座」を実施し、薬用植物シンポジウムなども開催して、一般市民向けの啓発活動にも力を入れています。

全地球的な環境破壊による植物資源の消失から貴重な植物資源を守るための施設という認識が大きくなりつつある中で、北里大学薬用植物園の存在は、これまでの職員の努力の結果、収集標本植物数、あるいは収集植物の重要性という点からも、全国有数の植物園として認められています。しかしながら、気候や周辺環境の変化により、植栽可能な植物も変化していくと考えられ、今後ひとつの植物園で管理できる植物数には限界が生じてきます。全国あるいは世界の各園の特色を活かすかたちでの、危険分散・分担保全が不可欠となるかもしれません。これからは独立した研究施設としての機能をもつ一方で、他園との連携がますます重要になってきます。ぜひこのような現状と課題もご理解いただき、見学者には薬用植物を観察していただければと思います。

キャンパス内案内



利用案内

開園日 大学の休日を除く毎日
 開園時間 9:00~17:00
 ドーム温室は日祝日閉館
 入園料 無料

一般公開日

毎年開催される「薬用植物シンポジウム」が相模原キャンパスで実施される場合には、講演終了後に職員が園内を案内し、実際の植物を観察しながら解説を行います。

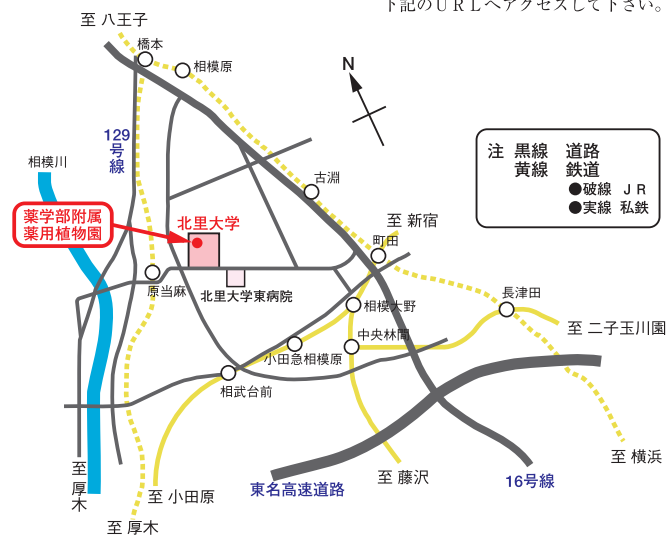
団体による見学

団体による見学は、事前にお電話でご相談ください。個人の見学はこの限りではありません。

見学者へのお願い

薬用植物園は教育、研究用の施設で、実験用として栽培研究中の植物など、貴重な植物が多数ありますので、下記の注意を守って見学して下さい。

- 動物の観察は観察路で行い、特に許可のない限り、採取したり、むやみに植物を傷つけたりしないで下さい。
- 観察路以外には立ち入らないで下さい。夏期休眠する植物や、冬期休眠する植物で地上部が枯れていて、地上には出ていない部分を踏み付けてしまう場合があります。
- 園内は禁煙となっております。また事故防止のため関係者から指示のあった場合はこれに従って下さい。
- 園内には駐車場がありませんので、車での来園は御遠慮下さい。
- 興味を持たれた方へはホームページにて当園の情報を提供しておりますので下記のURLへアクセスして下さい。



交通案内

電車・バスでのアクセス方法

小田急相模大野、小田急相模原、JR相模原各駅よりバス：「北里大学病院・北里大学」停留所にて下車、キャンパス内徒歩約5分。

* 駐車場はありませんので公共交通機関でお越しください。

問い合わせ

〒252-0373 神奈川県相模原市南区北里1-15-1
 北里大学薬学部附属薬用植物園
 Phone & Fax: 042-778-9308 (直通)
 URL <http://www.pharm.kitasato-u.ac.jp/bio-garden/>
 1-15-1, Kitasato, Minami-ku Sagami-hara City, Kanagawa 252-0373, JAPAN, Kitasato University, School of Pharmaceutical Sciences, Medicinal Plant Garden

Welcome to
 Bio-Garden



School of Pharmacy
 Kitasato University

バイオガーデン ガイド



ドーム温室全景

北里大学薬学部附属薬用植物園

薬用植物園の沿革と特徴

本薬用植物園の歴史は、福島県二本松市の大学実習所内に、開設の記念として紅白のハナミズキを植樹した1965年7月に遡り、54年の歴史を持つことになります。当時、薬学部生薬学教室古谷教授の構想と計画に基づきスタッフの協力により、キハダの苗の植栽や大黃の定植が行われました。その後、良好に生育したキハダの樹皮は毎年採取され、黄柏として生薬学実習の教材に供されました。

1972年、薬学部大学院博士課程の設置を機に、大学附属施設として相模原キャンパス内に再スタートしました。「柴胡の原の昔より…」と相模原市民の歌にあるように、現在でも重要な薬用植物のひとつである柴胡がかつて自生していたこの地は、首都圏の都市化に伴い大きく様変わりしましたが、近郊緑地保全区域に指定されて開発に歯止めがかかり、整備された県立相模原公園、相模原麻溝公園、道保川公園、神奈川県内水面種苗生産施設等の公共施設と共に学園として好ましい環境が保たれています。

一応の整備状況に達した薬用植物園見本園は、従来の温室と栽培見本園(樹木植栽区、栽培管理区、日陰植物区、水生植物区)の周辺環境の整備を行い1992年9月、装いを一新してバイオガーデン(BIO-GARDEN)と名称も改め、ドーム温室、樹木区、万葉植物区、ロックガーデン、伝統薬原料植物区、薬用樹木区、有毒植物区、落葉樹木区、育苗区、水生植物区、貴重植物区、有用植物区から構成される薬用植物園の新たな第一歩がスタートしました。

バイオガーデンの中心は、特徴的なドーム型温室です。360°展開したドーム内には十分な太陽光が取り入れられ、さらに温度や灌水の環境制御システムを導入し、熱帯・亜熱帯の薬用植物を効率的に植栽して展示効果を高めています。薬用木本区、薬用果樹区及び薬用草本区では日本薬局方に収載されている生薬の基原植物やハーブ・スパイス類の原料植物を中心に植栽展示されており、園全体の景観や季節に合わせて薬用植物の色、形、香りを体験できるよう工夫して配置されています。2010年3月には第一総合グラウンド内に薬用植物研究圃場が設置され、薬用ボタンや生薬の基原植物であるオケラ類やキク、ジャノヒゲなどが系統保存され、薬用植物の栽培研究を行っています。

データ

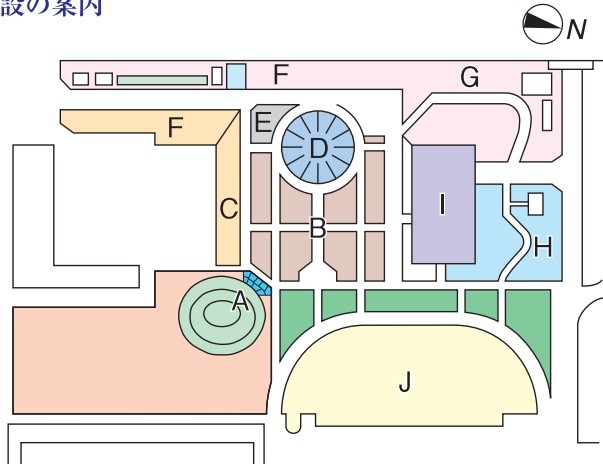
総面積: 6,302㎡ (バイオガーデン4,912㎡、研究圃場1,390㎡)

植物の種類: 約1,000種類 (うちドーム温室内250種)

バイオガーデン内 / ドーム温室154㎡、研究管理棟(延床面積:512.9㎡)〔化学・生物学実験室:122.6㎡、セミナー室85.9㎡、腊葉・生薬標本室:85.9㎡、図書室30.0㎡、ボイラー室:19.4㎡〕

資材倉庫: 28.3㎡、堆肥枠:54.0㎡

施設の案内



- A: ロックガーデン B: 薬用草本区 C: 薬用果樹区 D: ドーム温室
- E: 有毒植物区 F: 薬用木本区 G: 日陰植物区 H: 植物生態区
- I: 研究管理棟 J: クレセント (大学事務棟)



▼コウホネ *Nuphar japonica* DC.
スイレン科 (Nymphaeaceae) -生薬名: 川芎



▲コガネバナ *Scutellaria baicalensis* Georgi
シソ科 (Lamiaceae) -生薬名: 黄芩



▲ウラルカンゾウ
Glycyrrhiza uralensis Fisch. ex DC.
マメ科 (Fabaceae) -生薬名: 甘草



▲ボタン *Paeonia suffruticosa* Andrews
ボタン科 (Paeoniaceae) -生薬名: 牡丹皮



▲シナマオウ *Ephedra sinica* Stapf
マオウ科 (Ephedraceae) -生薬名: 麻黄



▲ガラナ *Paullinia cupana* Kunth
ムクロジ科 (Sapindaceae) -GUARANA



▲ナツメ *Ziziphus jujuba* Mill. var. *inermis* (Bunge) Rehder
クロウメモドキ科 (Rhamnaceae) -生薬名: 大棗